



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3500号 2017.2.3 発行

通算 3500 号を達成。衝撃的なやまゆり園事件から半年、これまでも多くの記事を紹介してきましたが、朝日新聞の特集と NHK のサイトなどでお届けします。【kobi】

やまゆり園事件から半年（1）～「ともに生きる」とはどういう意味なのか

朝日新聞 2017年1月30日



職員の佐藤悦也さんの手を借りて、新年を祝う数字を毛筆で書く高橋清文さん（下）＝横浜市栄区

ともに
生きる

やまゆり園事件
から半年

19人が殺

害され、27人が重軽傷を負った「津久井やまゆり園」の事件から、26日で半年が経った。事件は何を問いかけているのか、「ともに生きる」とはどういう意味なのか。神奈川の現場から考える。

■重度障害者の「思いの実現」模索する

毎日

横浜市栄区の桂台地区。生活介護事業所「朋（とも）」の車がマンションの前に止まった。職員の荻原浩孝さん（30）が呼び鈴を押すと、住民の湯沢淳子さん（73）が笑顔で外に出てきた。

「あら、よく来たね」

湯沢さんが助手席の檜垣円（ひがきまどか）さん（33）に声をかけ、アルミ缶の入ったポリ袋を手渡す。湯沢さんは「人見知りの円さんが笑うとうれしい。このふれあいが楽しいのよ」とほほえんだ。



曜日を決めて、空き缶回収に協力してくれる近隣住民宅をめぐる。約1時間かけて5軒ほどを回った。

檜垣さんは染色体異常による重い障害がある。この日はずっと助手席に座っていた。ときおり「ん」と声を出し、相手を見つめる。1軒回るたびに会話が生まれた。荻原さんは「缶回収自体より、おしゃべりすることが大事なんです」。

「朋」は重い身体障害や知的障害のある人が、自宅やグループホームから通う場だ。運

営するのは社会福祉法人「訪問の家」。重症心身障害児の母親たちが学校卒業後も集える場所がほしいと、1979年に作業所を作ったのが始まりだ。

法人は「一人一人が望んでいる（であろう）ことを実現させよう」という理念を大事にしてきたという。

法人が運営するグループホーム「ふおーぴーす」も訪ねた。大きめの個人宅のような外観で、職員の支援を受けて4人の障害者が一緒に暮らす。

鈴木幸子さん（56）は脳性まひ。文字盤を指さして気持ちを伝える。歌手松山千春さんのファンで、部屋にはポスターがずらり。コンサートで名前を呼ばれ、「手紙、読んだからね。ありがとう」と観衆の前で言ってもらえたこともある。

25年前に父親が病気で倒れ、入所施



設に移った。そのときの気持ちをつづった文章がある。

「しせつではおふろ、トイレの介助がおとこの人だった。いやだった。よるねるとき、ちはるのテープをきいていると職員が、でんきをけして、ちはるのテープを切ってしまった。もったききたかったのにくやしかった」

施設に戻りたくない母親に訴え、介助つきグループホームで暮らし始めた。

グループホームを統括する職員の田崎憲一さん（56）に手伝ってもらい、鈴木さんに話を聞いた。

「困っていることは何ですか」。質問を

聞き取った鈴木さんは、ボードに書かれたひらがなを一文字ずつ、大きく震える指で示していった。「は」「な」と指したように見えた。

「話を聞いてくれないこと、ですか?」。記者が問い返すと鈴木さんは田崎さんの人さし指をぎゅっと握った。「はい」の印だ。

田崎さんは言った。「みんな思っていることはたくさんあるのに、言えなかったりうまく伝わらなかったりして苦しんでいる」

重い障害がある人とどう意思疎通を図るのだろう。

ストレッチャーに横たわる高橋清文さん（22）は、目線を上に動かして「はい」の意思を伝える。

「天野さん（記者）と一緒に書き初めしたい?」。職員の言葉にじっとこちらを見つめた。「佐藤さん（職員）と一緒にならどうかな」と聞かれるとすぐに黒目が上を向いた。

数字が大好きという岡村宏彦さん（52）は、記者が差し出したノートに「43 33」



と書いた。「昭和43年のことじゃない？」という職員のヒントを得て、「メキシコオリンピックのあった年？」と聞くと、満面の笑みで親指を上げた。

島津賢作さん（49）と小林秀樹さん（39）のお出かけにも同行した。ときどきせきをしたり、うなったりする。電車に乗り、喫茶店に入っても、表情の変化はないように見えた。だが職員は帰り際、「2人とも楽しそうだったね」と満足げだった。

法人理事長の名里晴美さん（55）は「言葉が話せなくても何も感じていない人は絶対にいない」と言う。

やまゆり園事件から半年。記者はこれまで、この言葉を実感をもって理解できてはいなかった。

重い障害がある人たちと初めてじっくり接した。精いっぱい思いを伝えようとする姿が胸を打った。彼らが意思を伝えるとき、健常者の何倍ものエネルギーがかけられている。小さなサインを読み取るにも時間がかかる。そのぶん意思を通じ合えたときの喜びは、大きい。

朋の施設長の庄司七重さん（47）は「何か訴えてくれているようでも、分からずに終わることは多々ある。それでも、本人のいないところで大事なことは絶対に決めない。諦めずに聞こうとし続けることが大事なのだと、私たちは信じているんです」と語った。（天野彩）

やまゆり園事件から半年（2）～生きることだけに一生懸命な「いのち」を理解する



朝日新聞 2017年1月31日
伊藤光子さんと次女のまゆみさん。提供を受けた7枚の写真はすべて、まゆみさんの肩を抱く光子さんの姿が写っていた。「やっぱり、母親ですからね。常にまゆみを感じていたいんです」

「まゆちゃん、ほら、記者さんが来たわよ」

相模原市の障害者施設で、伊藤光子さん（75）が車椅子を押しながら次女のまゆみさん（48）に声をかける。少し瞳が揺れ動いたが、大きな反応はない。

「こうやって、物を介してコミュニケーションをとるのが好きなんです」。光子さんがひざの上に置いていた汁

粉の缶をまゆみさんの手に当て、話しかけるとニコリと笑った。

まゆみさんは重い知的障害と肢体不自由を併せもつ「重症心身障害者」。医療的ケアを必要とすることから「最も弱い障害者」とも言われ、全国に4万人ほどいる。

言葉を発することもできなければ、身体もほとんど動かさない。どうやって本人の思いをくみとっているのか。記者が尋ねると、光子さんはこう答えた。

「目の動き、表情、声。『多分、こうじゃないか』でもいい。繰り返し観察することで、おぼろげながら意思が見えてくる」

食べたい物はじっと見つめる。お気に入りの男性職員がいれば目で追いかけて、光子さんが食事をあげようとしても口を開かない。「まゆみだって、1人の女性。できないことの方が多いけど、できることだって、たくさんある」

生まれて1カ月ほどしてからのことだった。声をかけても目が合わない。あやしても笑わない。4歳上の長女と比べて明らかに成長が遅かった。

重度の脳性まひ。なぜなのかと光子さんは自分を責めた。就職、結婚、出産……。この

子は姉と違って「普通」の人生は歩めない——。駅のホームから線路に飛び込んで一緒に死のうと考えたこともあった。

1歳から続いたてんかんの発作は多い日で1日数十回にもなった。それが、毎日のように繰り返される。瞳孔が開き、手足がガタガタと震える。黙って見ていることしかできず、30分近く続くこともあった。

年に何度も入退院を繰り返し、「お願い、生きて」と祈るように看病した。「日が明けては暮れての繰り返し。毎日生きるのに精いっぱいだった」

だからこそ、小さい成長が健常者の何倍もうれしかった。ご飯を好き嫌いせず食べられるようになったり、排尿ができるようになったり。ワンピースを着て成人式に出席したときには、涙が出そうになった。昨年10月に自費出版した手記には、「いのち」についてこう記した。

「常日頃から『いのち』の危機にさらされ、その都度、献身的な医療や看護に守られている。たった一つの『いのち』を守ることによって、周囲に生きる喜びを伝えている」

伊藤さんは県重症心身障害児（者）を守る会の会長でもあり、相模原市の津久井やまゆり園で起きた事件の後、月命日に必ず園に足を運んで花を供えている。26日も献花し、「事件はどうしても風化していくけれど、やまゆり園を忘れないで」と話した。

半年前、植松聖（さとし）容疑者（27）が世の中に発した「障害者は周囲を不幸にするだけ」というメッセージ。インターネットには「正直正論だと思う」「被害者には気の毒だが、社会の負担にしかかかっていない存在」といった声もあった。こういう意見があるなかで、重症心身障害者とともに生きることをどう考えればいいのか。

記者の問いに、伊藤さんは静かに答えた。「あなただって、まゆみだって同じ『いのち』。こうやって、生きることだけに一生懸命な『いのち』があるということを知っていただくことが大事なのではないでしょうか」（照屋健）



やまゆり園事件から半年（3）～差別の見えづらい時代に

朝日新聞 2017年2月1日

渋谷治巳さん＝横浜市磯子区

横浜市磯子区にある一般社団法人「REAVA（ラーバ）」の理事長、渋谷（しづや）治巳（はるみ）さん（60）は脳性まひで全身に重い障害がある。食事や入浴など、生活全般に介助が必要だ。

15年ほど前に実家を出て、一人暮らしを始めた。年齢を重ね、「そろそろ出ないと、一人暮らしに移れなくなる」と思ったからだ。今は午後9時になるとヘルパーが帰り、翌午前7時まで自宅でひとりで過ごす。

やまゆり園の事件以降、「ともに生きる」という言葉がよく使われるようになった。その言葉は何を意味するのだろう。記者の問いに、渋谷さんは言った。

「障害者が学校のクラスにいる、同僚や部下や上司に障害者がいる、家に帰れば隣には障害者が住んでいるということだと思うんです。今はほとんどそうっていないじゃないですか」

障害者が親元や施設を離れ、地域で暮らそうと思っても、バリアフリー物件は極めて少ない。

「住むところも学ぶところも働くところも別。日常生活を共有できないと、お互いに理解することはできないと思うのです」

渋谷さんは横浜で生まれ育った。養護学校を出て19歳で施設に入った。山奥の施設の

暮らしにプライバシーはなく、規則に縛られた生活。「ここで暮らして何になるんだ」。数年で実家に戻った。

やがて障害者運動と出会う。仲間らとともに自立や自己表現を目指し、1988年に作業所を作った。

実家がある保土ヶ谷から磯子まで電車で通った。エレベーターの少ない時代。階段前で通行人に駅員を呼んでもらった。時には通行人も協力し、車いすをかついでもらい階段を上下した。

駅員も渋谷さんもお互いに大変だ。「こんな時間に来ないでくれ」「人手のある時間ならば」。けんかしたり譲歩したり、コミュニケーションがあった。

運動の成果で、駅や公共施設のバリアフリー化が進んだ。駅員とけんかすることもなくなった。

「でもそれは『ともに生きる』ことには結びつかなかった」と言う。

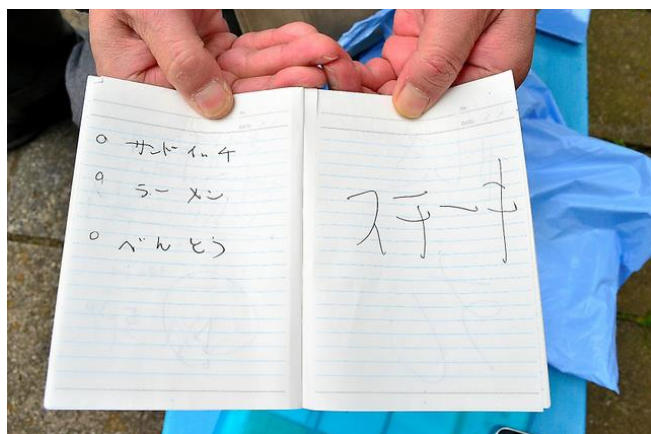
車いすが来ると駅員は行き先を聞き、乗る位置を決めて付き添う。ホームと車両の段差が少ない駅なら自分だけで乗ることだってできるのに、だ。

「すごく優しいけれど、管理です。僕が駅員の付き添いを断って事故が起きたなら自己責任だと思うんですけど、そうならない。保護するのではなく、権利と責任の主体として見てほしい」

一見、障害者に優しい社会になった。車いすでどこにでも行ける。入店を断られることもない。一方で、新型出生前診断が広がり、染色体異常がわかった人の9割が中絶を選ぶ。事件の根っこに、優生思想が生きている。

「僕たちが社会に受け入れられたのかといえばそうではない。差別が見えづらくなっているのです。障害者は存在を主張し続けなければ生きていけない。これからますますそうなっていくと思います」(太田泉生)

やまゆり園事件から半年(4)～福祉の「家族依存」、脱却を



朝日新聞 2017年2月2日
意思疎通にはカードやノートを使う。孝さんは昼食の候補を三つ書いて選ばせた。右側は夜に何を食べたいかと聞き、鉄男さんが「ステーキ」と書いた＝横浜市緑区

津久井やまゆり園の殺傷事件をきっかけに、障害者が暮らす場を大規模な入所施設から、地域の小規模なグループホーム(GH)などに移す、「施設から地域へ」という理念が改めて語られている。

ただし県内はもともと人口に対して大規模施設が少なく、障害者の施

設入所率は全国平均の半分ほどだ。

「施設やGHが満員で入れず、高齢の親が障害者と暮らす老障介護の実態がある。福祉の『家族依存』の構図に目を向けてほしい」

横浜市自閉症児・者親の会の宍倉孝さん(58)＝同市緑区＝はそう訴える。

宍倉さんの次男の鉄男さん(28)は、最重度の知的障害をとまなう自閉症だ。

「できないことは親が補い、できるこ



とに目を向けよう」。夫婦でそう心を決めて育ててきた。否定的な言葉は使わず、よかったことを褒める。夏は親子でカヌーを楽しみ、冬はスキー旅行へ。障害があっても前向きにと心がけてきた。

心配なのは今後だ。自分たちが年老いた時にどうするか。できれば人里離れた大規模施設ではなく、家庭的で生活の自由度が高いGHに入れてやりたい。

だが施設もGHも満員だ。1人空きが出ると入所希望が100人以上殺到することもある。

知的障害者には自傷他害が激しく対応が難しい「強度行動障害」の人もいる。横浜市の推計では、強度行動障害者の半分強（約1200人）は在宅だ。施設に空きがなく、親と暮らす事例が多いとみられる。

「親の高齢化で行動障害のある人を支える生活基盤が崩れてきている」「支援する現場が疲弊している」

宍倉さんも委員として参加した、知的障害者の住まいをめぐる横浜市の検討会の資料には、そんな深刻な実態がつづられている。

津久井やまゆり園は、こうした人を受け入れる代表的施設の一つだった。

なんとか入所できても、その後も課題がある。

強度行動障害に対応するノウハウを持ち、地域移行を進める施設もあるが、数は限られている。津久井やまゆり園について、小島誉寿・県福祉部長は取材に「園では地域移行が進んでいなかった。見守り施設になっていた」と語った。

数少ない入所施設に障害が重い人が滞留し、その手前にいる人たちは家族が必死に介護してきた形だ。

事件をきっかけに、こうした状況を見直すべきだと宍倉さんは言う。

一つは、入所施設をGHに移るための「通過施設」と位置づけ、生活の場としてのGHを増やすことだ。先進的な施設では、GHを疑似体験できる構造とし、状態が落ち着けば施設を出るのだという。

こうすることで、家族依存も減らせる。「GHへの移行は本人の生活の質を高めることにもつながる。親にとって大事な要素です」

宍倉さんは、鉄男さんが小さい頃に教わった「親は最良の支援者にも最大の加害者にもなる」という言葉が忘れられない。

鉄男さんに不安やストレスがかかると、行動障害も悪化する。早い段階から行政が親を手厚く支え、障害がゆえに苦手なことや、どう接したらよいのかといった知恵を伝えることも、行動障害を重くさせないために必要だと感じている。

望むのは、障害者を遠い施設に囲い込むのではなく、老親に背負い込ませるのでもない社会だ。健常者と同じように成人して親元を離れ、地域で暮らせる社会になるだろうか。

「同調圧力の強い社会は障害者にはつらい。障害者が地域で生きていくには多様性が認められなければ。それが『ともに生きる』ということだと思います」（太田泉生）

批判相次ぎ、策定期限を夏まで延期 「やまゆり園」再生構想で知事

神奈川新聞 2017年01月28日

46人が殺傷された相模原市緑区の障害者施設「津久井やまゆり園」の再生基本構想をめぐり、県は27日、策定期限を当初の3月から今夏に延期することを決めた。構想案に相次いだ批判を踏まえた対応で、黒岩祐治知事は同日「多くの意見を聞き、納得できる形で進めるのが共生社会の実現にとって大事」と説明した。県障害者施策審議会に専門部会を設け、あらためて構想内容を議論する。

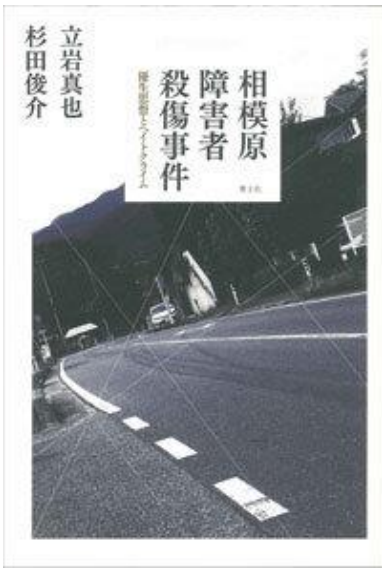
来年度当初予算に基本設計費を計上することも見送る。来年度から4年間で建て替える予定だったが、知事は「若干の遅れが生じる可能性はある」と述べた。

専門部会のメンバーは、同審議会委員を務める有識者や障害者団体幹部らから8人選任。

2月3日に審議会の承認を経て部会を設置し、同月下旬に議論をスタートする。同園入所者の家族会や政令市職員などから意見を聞く機会も設ける。部会の議論を踏まえ、県は6月上旬以降に構想案を作成、公表し、夏ごろ取りまとめる予定だ。

現在地での建て替え方針について、知事は「白紙撤回ではない。我々が出した案の背景をしっかりと説明し、いろんな声に耳を傾けたい」と語った。入所者本人の意向も聞き、構想に反映させたい考えだが「意向確認に1年かかると言う人もおり、それならすぐ反映できない。そうしたことも踏まえながらこの議論は進んでいく」と説明した。

事件から半年…… 相模原障害者殺人事件は前触れにすぎない？ 植松容疑者の「思想」はなぜ、共感を呼んだのか



日刊サイゾー 2017年1月26日
『相模原障害者殺傷事件—優生思想とヘイトクライム—』(青土社)
神奈川県相模原市にある障害者福祉施設「神奈川県立津久井やまゆり園」で、この施設の元職員・植松聖(当時26)の凶行によって19人の入所者が殺害された事件から、半年が経過した。戦後日本国内で発生した事件として、「津山三十人殺し」に次ぐ犠牲者の多さとその規模もさることながら、ネット上に寄せられたこの事件の犯人に対する共感は、ショッキングな出来事として記憶された。いったい、なぜこの事件は起きたのか？そして、この事件から何を考えなければならないのか？社会学者で、『弱くある自由へ』『精神病院体制の終わり』(青土社)などの著作を持つ立岩真也と、『非モテの品格』(集英社新書)、『フリーターにとって「自由」とは何か』(人文書院)などで知られる批評家の杉田俊介による共著『相模原障害者殺傷事件—優生思想とヘイトクライム』(青土社)から、この事件を振り返る。

返る。

植松容疑者は、事件決行5カ月前、2016年2月半ばに衆議院議長大島理森に宛て、「職員の少ない夜勤に決行致します」「見守り職員は結束バンドで身動き、外部との連絡を取れなくします」など、犯行予告と理解できる手紙を書いて、公邸を警戒中の警察官に手渡している。

その一方で、日本軍の設立、5億円の支援を要求するなど、支離滅裂な内容がしたためられたこの手紙で、彼は「私の目標は重複障害者の方が家庭内での生活、及び社会的活動が極めて困難な場合、保護者の同意を得て安楽死できる世界です」「障害者を殺すことは不幸を最大まで抑えることができます」と主張する。「全人類が心の隅に隠した想いを声に出し、実行する決意を持って行動しました」「私が人類の為にできることを真剣に考えた答えでございます」と、社会のために障害者を殺害することを強調。事件後にも、捜査関係者に対しては「殺害した自分は救世主だ」「(犯行は)日本のため」と供述している。

いったい、どうしてこんな支離滅裂で身勝手な主張に、シンパシーが寄せられるのだろうか？

今回の事件を受けて語られるようになった言葉のひとつに「優生思想」がある。優れた子孫の出生を促し、劣った子孫の出生を防止することで、民族の質を高めると考えるこの思想。ナチス・ドイツ政権下での精神病者・障害者に対する断種などが有名だが、実は日本でも1996年まで「優生保護法」があったように、その思想はつい最近までわれわれの身近に存在していた(現在は「母体保護法」に改称されている)。植松容疑者の「人類のために」障害者を殺害するという発想も、この優生思想に影響されたものである。そんな彼の思考や、事件がもたらした余波を受けて杉田が感じたのは、次のような「ヘイト」とのつ

ながりだった。

「青年（編注：植松容疑者）の精神が、この国をじわじわと侵食してきた近年のヘイト的なものの空気を確実に吸い込んできた、（中略）彼の言葉はヘイトスピーチ的なものを醸成してきたこの国の『空気』をどう考えても深く吸い込んできたのであり、その意味でこれはヘイトクライム（差別的な憎悪に基づく犯罪）なのである」

もちろん、現在では優生思想はタブー視されている。しかし、一部の人々がシンパシーを感じてしまうように、それを乗り越えることは簡単なことではない。杉田も、自身の経験から、自分の中にある「内なる優生思想」に対する迷いを、以下のエピソードとともに記述している。

超未熟児として生まれた杉田の息子は、平均的な身長に追いついていないため、成長ホルモンの注射を打っている。保育園でほかの子どもから「なんで小さいの？」と言われ、母親に泣きつく子どもと、ほかの子どもたちとの体格や運動能力の差が目につくようになる。「男の子の場合、背の低さ、身体の小ささが大きなデメリットになるはずだ、そういう功利計算が親である僕らには働いた」と語る杉田。彼自身も、内なる優生思想に対して解決のめどがつかないことを告白する。

一方の立岩は、かつて日本で起こった障害者殺害事件を丹念に掘り返し、この事件を精神医療の問題とすべきではない、と主張。さらに、この事件を取り巻く社会について、社会学の言葉でドライに記述していく。杉田と立岩の思考も、必ずしも一致しているわけではない。本書の中で、2人は安易な「正解」には決して飛びつかず、回りくどくても本当の意味でこの事件の真実に迫る道を探しているようだ。

本書に収録されている立岩との対談の中で、杉田は「悪い方に考えすぎだ、と笑われるかもしれませんが」と前置きしながらこう語る。

「今回の事件はまだ入口にすぎない気がするんです。あれが最悪という感じが少しもしい。これからもっとひどいことが起こる前兆であり、前触れという気がする」

今後の裁判では、次々と新たな事実が明らかにされていくことだろう。杉田の予言めいた言葉が現実のものとならぬよう、この事件については、さまざまな側面から議論がなされなければならない。（文＝萩原雄太[かもめマシーン]

NHK「19のいのち」をたどって

今回の事件で、警察は犠牲になった19人の方々のお名前を公表していません。

19人おひとりおひとりに、豊かな個性があり、決して奪われてはならない大切な日常があったはずですが、私たちはこれまで十分にお伝えすることができずに来たと思っています。そして、過去に例をみない凶悪な犯罪の衝撃は、事件から時がたつにつれて社会から薄れていっているように感じています。

私たちは、失われた命の重さを伝え、その痛みを少しでも想像し、みんなで受け止めていくことで、再び悲劇を生まない社会を作っていきたいと考えています。

19人の方々を知る人たちが語ってくださった思い出のかけらを集めて、確かに生きてきた「19のいのち」の証しを、少しずつここに刻んでいきたいと思っています。

⇒ <http://www.nhk.or.jp/d-navi/19inochi/>

